

自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成（3年次）

～極小規模校だからこそできる授業の工夫を通して～

阿武町立福賀小学校

1 はじめに

本校は、農業、林業、畜産業が盛んな山間部に位置していて、地域素材に恵まれた環境にある。本年度の児童数は8名で、第1・4学年が欠学年のため、第2・3学年、第5・6学年が複式学級の編成をとっている。日頃は少人数の授業中心だが、年間を通して全校合同授業や福賀ふるさと夢太鼓等、全校で行う授業や活動もたくさんある。コロナ禍が明けた今では、担任の創意工夫を生かしたふるさと学習や、地域の方も授業に参加できる福賀小公開講座等、「極小規模校だからこそできる」教育活動が展開されている。

本年度は、上記の研究主題を掲げた取組の最終年次であり、萩地区へき地複式教育研究大会の発表の年でもある。1・2年次の成果と課題を踏まえ、「極小規模校だからこそできる」複式授業の創造とその確立をめざしてきた研究の軌跡をここに示す次第である。

2 研究主題

上記の研究主題は、自己表現が苦手であるという、本校児童が長年抱えている課題に対して設定したものである。その課題を教師のもつ創意工夫と行動力を生かして解決するために、上記の副主題を設定した。この研究主題・副主題の下、極小規模校における新たな教育活動の創造を研究の目的とした。

3 研究の内容

(1) 研究の経緯

1年次（令和3年度）『地域素材の教材化』

主にふるさと学習に重点を置き、地域素材の教材化を図るとともに、児童の情操教育の場と位置付け、そこで体験したことを表現力の育成につなげることもねらった。この年度の主な取組は以下のとおりである。

- ・ 地元飞来したアサギマダラの観察、地域おこし協力隊の方による草木染体験 等
- ・ 無角和牛とホルスタインを比較しながらの調査活動
- ・ スマート農業の見学と体験及び「福賀の農業のすごいところ」についての討論会
- ・ 間伐の見学と間伐材を使った発電についての講話及び発電のモデル実験
- ・ 四つ葉サークルによる紙芝居「宇生賀の七不思議」と、それに関わる場所を巡るウォークラリー

本校では、毎年11月に学習発表会を開催している。保護者とその親戚、地域の方約80名が見に来られるため、ここをふるさと学習の集大成として位置付けている。図1は、観察したアサギマダラを主人公に、「はらぺこあおむし」のストーリーに寄せて学習したことを発表するという、担任の創意工夫が生かされたものである。



図1 学習発表会の1コマ

2年次（令和4年度）『全校合同授業における効果的な指導方法の確立』

全校合同授業を計6回行い、そこで講じた工夫や手立て等の効果について検証し、

異学年で授業を行う際の指導方法の確立をめざした。その結果、授業には次の2つのタイプがあり、それぞれの長短所が明らかになった。

- | |
|--|
| <p>①全学年共通のテーマで、全学年同じ学習活動の授業（全校学級活動、全校道徳）
共通の課題意識をもたせるのは比較的容易で、縦割り班の話合い活動も今までの積み重ねがあるので、授業者はねらいどおりの授業を仕組みやすい。しかし、各学年の主眼の設定が不十分になりがちで、学習の深まりという点で弱さがある。</p> <p>②全学年共通のテーマで、学年別の学習活動の授業（全校算数科、全校国語科、全校図画工作科、全校音楽科）
児童の興味を引く共通のテーマの設定に授業者のアイデアが試される。学年に応じた主眼の設定は容易だが、それを達成させる課題設定や手立てにも授業者の力量が問われる。これらがクリアされれば、学習の深まりにつながるものとする。</p> |
|--|

(2) 本年度の研究

3年次『極小規模校だからこそできる授業の創造』

1・2年次の研究で見出した成果と課題を精査し、教科等における本校ならではの複式授業の確立をめざした。複式授業といえば「わたり」、「ずらし」、「リーダー学習」等という固定観念を捨て、極小規模校でも「学び合い」、「関わり合い」、「対話」等を仕組んだ授業を創るというものである。

昨年度見出したタイプ2の授業を基に、研究の視点を次のように設定した。

<p>視点1 異学年と効果的な関わりをもたせる活動の工夫</p>

<p>極小規模校の複式授業においても、友達との関わりに学ぶ楽しさと有用性を感じさせたい。どの段階で、どのような目的で、どのような関わりをもたせるか。そして、その関わりが効果的であったかどうかを一つの視点とする。</p>

<p>視点2 各学年の学習を保障する手立ての工夫</p>

<p>異学年との関わりに情意面の高まりを求め、それを原動力に各学年の学習を確かなものにしたい。そこで、阿武町小中3校共通の育てたい心や力である「きづく」、「きめる」、「かかわる」、「やりぬく」の仕組み方を二つ目の視点とする。</p>
--

4 具体的な取組 ～萩地区へき地複式教育研究大会より～

(1) 算数科 第2学年「かけ算(2)」・第3学年「かけ算の筆算(1)」【指導者 清水 学】

ア 主眼

2年生は既習事項をもとに6の段の九九の構成を、3年生は被乗数の23を20と3に分けて計算する方法を見出す活動を通して、かけ算の仕組みをとらえることができる。

イ 共通のめあて「かけ算を使ってゲーム屋さんのじゅんぴをしよう！」

ウ 各学年の学習課題

2年：『6のだんの九九を考えよう』

3年：『 23×3 の計算の仕方考えよう』

エ 研究の視点との関わり




視点1 異学年と効果的な関わりをもたせる活動の工夫

みんなでお店屋さんを成功させるという意識を高め、導入では未習の課題について、既知事項をどう活用するかを話し合わせることで、解決の見通しをもつようにする。終末ではそれぞれが身に付けた技能を使って計算を分担する。その際、3年生は2学年にできそうな計算は任せるなど、異学年との関わりを意識させる。

視点2 各学年の学習を保障する手立ての工夫【「やりぬく」】

学習の流れを黒板に示し、各学年で学習が進められるようにする。その際、両学年とも既習事項を生かして自力解決したり、3年生にはバーチャルクラスメイトを使って、かけ算の筆算につながる見方・考え方ができるようしたりする。

オ 授業の実際 参観者の評価 (◇肯定的な意見 ◆改善点等)

導入 (合同)		<p>用意する玩具や材料の個数をどのように求めればよいか話し合う。</p> <p>◇めあてが共通でも、学年別の課題によってできることを分けていた。</p> <p>◆計算できるまでか、筆算ができるまでか、計算を分担させるまでか等、めあてが不明瞭に感じた。</p>
展開 (学年別)		<p>2学年は6の段の九九作りに、3学年はかけ算の2位数×1位数の計算に取り組む。</p> <p>◇各学年で集中して取り組んでいた。</p> <p>◆かけ算の有用性を実感させるために、バーチャルクラスメイトから、もっとたくさんの意見があるとよかった。</p>
終末 (合同)		<p>ゲーム屋さんで必要な材料の数を、協力して求める。</p> <p>◇2年生が $15+15+15$ の考え方で、3年生の問題を解いていた。</p> <p>◆計算問題を分担するとき、2・3年生の学習内容ではなく、自分が担当したいゲームで判断していたので、具体的な指示が欲しかった。</p>

(2) 国語科 第5学年「固有種が教えてくれること」・第6学年「『鳥獣戯画』を読む」
【指導者 三輪 美咲】

ア 主眼

文章と資料との関連について話し合う活動を通して、それぞれを結び付けて内容を捉え、読者に伝わりやすくするための表現の工夫について知ることができる。

イ 共通のめあて「筆者のねらいを読み取ろう」

ウ 各学年の学習課題

5年：『写真はなくてもよいのではないかな。イラストでもよいのではないかな。』

⇒ (追加課題)『なぜ、ニホンリスの写真を入れなかったのだろう。』

6年：『なぜ絵を分けて示したのだろう。』

⇒ (追加課題)『分けて示した絵を、また1枚につなげて示したのはなぜだろう。』

エ 研究の視点との関わり

視点1 異学年と効果的な関わりをもたせる活動の工夫

- ・めあてとまとめを合同で行うことで、共通点を見付けながら、互いの学びを意識することができるようにする。
- ・教材が違うものの課題解決の成果を互いに説明し合うことで、筆者の考えが伝わりやすくなる資料や絵の効果をさらに実感できるようにする。




視点2 各学年の学習を保障する手立ての工夫【「きめる」・「かかわる」】

- ・具体的な課題を keynote やテレビに示すことで、一人ひとりが学習に取り組むこ

とができるようにする。

- ・課題解決後、子どもの考えを揺さぶる追加課題を準備しておくことで、筆者の意図について考えを深めることができるようにする。

オ 授業の実際 参観者の評価 (◇肯定的な意見 ◆改善点等)

導入 (合同)		<p>前時の振り返りを基に行い、それを基に本時の課題について話し合う。</p> <p>◇教師も全体を把握できるので、めあてや振り返りを合同で行うのはよいと思った。</p> <p>◆終末で提示したポスターを導入にもってくると、展開での気づきをもっと生まれたかもしれない。</p>
展開 (学年別+合同)		<p>学年別の課題に取り組み、自分の考えを発表する。</p> <p>◇ICTの活用で学習の流れがわかりやすく、一人学びがスムーズに行われていた。教師も今どの段階に取り組んでいるか把握できていた。</p> <p>◆各学年で考える時間も必要で、合同で行うことで学習時間が半分になったのはもったいない。</p>
終末 (合同)		<p>資料の示し方とその効果について話し合ったことを基にまとめと振り返りを行う。</p> <p>◇違う活動でも学習内容の幅を広げることができ、5年生も新たな発見があったと思う。</p> <p>◆合同で行うのは、下の学年はプラスになるが、学習している上の学年はプラスになるのだろうか？</p>

5 成果と課題

当初のねらいどおり、異学年との関わりに、学ぶ楽しさと有用性を感じる姿がそれぞれの授業で見られた。展開の一人学びや学年別の活動に意欲的に取り組んでいたのも、学習の進め方の明示と異学年への意識が相まって効果を表したものと考えられる。また、第2・3学年の算数科のように、2年生が 15×3 を $15 + 15 + 15$ の考え方で解く等、系統性が明らかな学習内容を組み合わせると、学年横断的な学習も可能であることが分かった。

課題としては、参観者の評価にもあるように、上の学年にとってプラスになるかということが挙げられる。これは、教科等の特性に関係するのではないだろうか。前述したとおり、系統性が明らかな算数科では、上の学年は既習事項の想起として、下の学年は既習後の発展問題として扱える。しかし、今回の国語科のように、説明文の内容に着目させるのか、筆者の技法に着目させるのかに授業を創る難しさがある。授業者は後者をねらいたいところだが、児童は前者に意識があるのが当然で、それを抜きに授業は進められない。今後は教科等の特性を考慮しながら、本研究を深化させる必要がある。

6 おわりに

「極小規模校だからこそできる」を研究の軸として掲げることで、教員の授業づくりに対する意識も変わってきた。また、へき地複式教育の新しい形を提案できたことで、萩地域の本校と同様な学校にもよい刺激になったと思う。このように、校内外で切磋琢磨しながら、極小規模校及び小規模校の教育を充実させることを願っている。